

そして上海

益子 一彦

黒みを帯びた赤煉瓦の建物群は、かつては倉庫だった。

昔の姿を留めながらも、今は地ビールレストランや土産物のショップになり、観光スポットとして人気を博している。そこから南に少し歩いていくと、山裾には坂道に沿って開港当時の面影を偲ばせる儀洋風の建物が点在している。公会堂へ続く坂道の途中にある旧英国領事館もそんな建物のひとつだ。

旧英国大使館という異国の響きに誘われて、ティレストランのドアを開けた。そして、その窓辺の席に腰を下ろし、そこから函館の景色を眺めることにした。

辺りに景色を遮る高い建物はなく、雲の切れ間から差す日の光に入り江の水面が輝いて見えた。僕はそのたおやかな景色を目に写しながら、ティポットの脇に置かれた砂時計の砂が落ちるのをぼんやり待った。そこには、昔も立てずに落ちる砂とシンクロして、日常とは違った時間が流れはじめていた。

ティポットを暖めたカバーを取りながら、

「函館はサンフランシスコに似ている」
そう思った。

ガイドマップは、海から不規則に切り取った陸地に整然とした升目を描いている。けれども、地図からは実際のことは何もわからない。急斜面の丘に強引に敷かれた碁盤目状の道路は、けつして整然としたグリッドなどではなく、サンフランシスコを魅力的な街に仕立てている大掛かりな装置なのだ。

サンフランシスコにはアジアの香りがする。そんなサンフランシスコでも、チャイナタウンは特別な場所だ。そこに足を踏み入れた途端、風景は一変する。漢字とアルファベットで書かれたけばけいしい看板が氾濫し、極彩色に彩られたミニチュアの中国風のペディメントに建物が装飾される。東洋系の人たちが忙しなく行き交い、乾燥しているはずの空気さえも湿っぽく感じられる。一昔前のハリウッド映画に登場する中国人のような黒ぶちの丸いめがねを掛けた背の低い小太りの男が現れて、言葉巧みに怪しい商売話を持ちかけてこられても少しも不思議ではないと感じてしまう。

サンフランシスコのチャイナタウンには、中国ディックな情景がそこかしこに転がっている。この上なく中国風の気分にはなれるのだが、中国とは明らかに違う。異国中で極端にデフォルメされ、凝縮された中華なのだと思えてくる。

いつの間にか、時計の砂はじっと留まっていた。

ノスタルジックな港町。そして、港へ続く坂道。のろのろと走る路面電車。港の倉庫街。無理矢理に共通するものを挙げれば、いくらでもこじつけられる。けれども、サンフランシスコを思い出したのは、そんなことが理由ではなかった。この旧英国領事館に来る坂道の途中で「中華会館」という看板を目にしたからだ。坂の途中で出会った中華の文字が、僕の記憶にあるサンフランシスコに飛躍させたのだ。

そういえば、上海には坂はなかった。少なくとも坂道を歩いた覚えはない。そればかりか、一千万人をはるかに超える中国人がひしめく上海で、映画で見るとような中国人に出会うような気にはならなかった。中国っぽいと思えるような土産物を目にすることすら難しかった。けれども、そこにはリアルな中国があった。

一九九六年。上海に着いた翌朝、普段よりも早く目を覚ました。

一時間の時差よりも断然早い時間だった。少し虚ろなまま窓辺の椅子に座わり、テーブルに用意されていた少し水垢の付いたポットのお湯を湯のみに注いで、ちようど飲み頃の温さの中国茶を飲みながら、まだうす暗い窓の外を眺めた。

正面には入り江のような黄浦江が見える。右手には黄浦江に面する通りに沿って、二〇世紀初頭のネオクラシズムの建物群が堂々と建ち並んでいる。川沿いの公園には、まだ夜も明け切らないうちから、大勢の人たちが太極拳のような構えでスローなテンポで体を動かしている。その景色を眺めながら、僕は思わず鼻歌を口ずさんでいた。

な・が・れ、ない、のが、うみなら……。
そ・れ・を、けす、のが、なみです……。

上海の歴史は、十九世紀の西洋列強の中国進出に始まった。租界時代はそれほど昔のことではない。ホテルの窓から見える外灘の景色は、その時代を今に留めている。かつてその入口に「大と中国人入るべからず」という立て札が立てられていたという公園が眼下にあった。中国人にとってはこの上なく屈辱的な場所であったろうけれども、そんなことなど誰も気に留める様子もなく、どこから溢れ出てきたのかと思うほどのたくさんの人たちがその場を埋めていた。

鼻歌を歌いながら、その景色をもっと近くで見たいと思った。そう思うとじっとしていられなくなり、急いで着替えを済ませて、夜明けの街に飛び出した。それから一週間、朝の一連の行動は僕の日課になっていた。

それが、僕にとつてのはじめての上海だった。

虹橋空港には、近代化に取り残された共産圏の匂いが摺り込まれていた。赤い襟のついたカーキ色の制服を着た審査官の厳めしい入国審査を済ませて空港の建物を出ると、さして広くもない車寄せに人が溢れ、汚れた車がぎこちなく行き交っていた。空はどんよりと霧がかかったようで、空気もどことなく埃っぽさを感じた。空港周辺から市の中心部までその埃っぽい

空気は同じだった。

上海を訪れた目的は、上海市の図書館関係者と交流の機会をもつことだった。事の成り行きは、さらに一年前に上海市図書館の視察団がつくばに訪れたときに遡る。そのときの視察団の一員だった鮑氏の計らいによって、上海訪問が実現した。図書館情報大学名誉教授・竹内愨先生と、僕が所属する三上建築事務所の所長・三上清一に随行したのだった。

上海に着いた日から帰るまで、僕たちは滞在中の一切を鮑延明氏 (Mr. Bao Yan Ming) のお世話になった。鮑氏はかつて図書館情報大学に留学し、帰国後は上海市図書館に勤務していた。彼は日本への留学経験と堪能な日本語を活かして、日本との交流の窓口の役目も務めていた。

「ごちゃごちゃとした街中を通り抜けて、かつてブロードウェイ・マンションと呼ばれた建物の近くにあるシーガルホテルに案内された。上海でもっとも眺めのよいホテルであることから、鮑氏がこのホテルを予約してくれていたのだ。まだ民営化されたばかりらしく、フロントでの対応はサービスとは程遠く、建物の掃除も十分に行き届いてはいえなかった。それでも、ホテルの部屋は十分に快適だった。

一週間の滞在期間中に、僕たちは上海市と大上海市圏域のいくつかの図書館を視察し、上海市図書館の人たちや上海図書館学会の人たちとの会合をもつことができた。

視察した図書館は、かつては別の用途に使われていた建物を流用しているものもあれば、比較的近年に建てられたものもあったが、どれもが埃を被った書庫のようで、二十年以上も前にタイムスリップしたような印象だった。

学会の人たちとの会合が行われたのも、路地を入り込んだ古い建物の一室だった。椅子に座って机の上でメモを取ろうとす

ると、肘が肩の高さと同じになってしまふようなところだった。そこで、スライドを使って僕たちが関わった図書館の紹介を行ったのだが、紹介した図書館と彼らの日常の図書館との間に隔たりがあったためか、参加者の反応は良好とはいえなかった。

当時の上海市図書館は、市役所や博物館などが集中した市の中心部の人民広場の近くにあった。図書館の建物は、もともとは英国租界の競馬場であった。時計塔のネオクラシズムの落ち着いた外観が印象的であったが、内部は競馬場の流用ということもあって、まるで迷路のようだった。また、そこで働く人たちは、幹部は外国への留学経験をもつエリートであったが、カウンターの職員はその場で弁当を食べ、大きな声でおしゃべりをしているような仕事振りだった。

しかしながら一方では、上海市図書館は新しい方向を定めていた。

南海西路に新しい建物（現在の上海市図書館）が建設の最中にあつた。設計を担当した上海建築院の高級建築師・張皆正氏と唐玉恩氏の案内で、その現場を視察することができた。延べ床面積八万一千平方メートルの『双頭の龍である』という形態の思想的根拠と大まかな構成について説明を受けた。まず形があるというのがここでのやり方のようだった。

モノの造られかたも日本とは違っていた。現場内は比較的整然としていたけれども、比較的高層の建物でありながら足場は木製であったり、壁の下地は叩けば簡単に砕けるような軽い煉瓦が積まれていたり、日本の工事現場の事情とは大きく異なっていた。

あれから六年が過ぎた。今年七月、六年前と同じメンバーと共に再び上海を訪れる機会を得た。

十四日の夜、浦東空港に着いた。それは新しく建設された巨大な空港だった。闇の中に幾筋もの滑走路が白く浮かび上がり、それがはるか彼方まで続いているかのような広さを感じた。ターミナルビルも空港の格に相応しく大きな建物だった。現代の空港の教科書どおりに、物と人間がスムーズに入出力される機能性と、テンション材を用いた大スパンの屋根構造とガラスのカーテンウォールによる清潔感を備えていた。漢字の「浦東空港」の文字を見なければ、そこに中国っぽいイメージはなかった。

荷物をピックアップしてゲートを出ると、上海図書館の鮑延明氏とかつての同僚・林氏が出迎えに来てくれていた。

今回もまた、鮑氏は僕たちをホテルまで車で案内してくれた。その車も六年前のような商用車風のバンではなく、アメリカンスタイルの大型ワゴンだった。僕たち一行を乗せた上海市図書館の車は、空港を出ると高速道路を滑るように市街地へ向かった。フロントガラスの向こうには、橙色の街灯にどこまでも続く幅の広いまっすぐな道が浮かびあがっていた。もはや六年前に感じた埃っぽさは微塵もなかった。

車中で鮑氏は、あつという間に新しい大きな空港ができて、同時に空港と中心部を結ぶ高速道路が整備されたことなど、上海が大きく変わっていることを半ばあきれながらも自慢気に説明してくれた。

今回の上海訪問の主たる目的は、上海市図書館設立50周年を記念した第一回国際フォーラムへ参加することだったが、我々の訪問にあわせてフォーラムのプレカンファレンスとして、上海図書館学会との交流会を企画してくれていたのだ。

プレカンファレンスは、フォーラム開催前日の七月十五日に行われた。

会場となった上海市中心部にある黄浦区立図書館のレクチャールームには、市内の大学や公共図書館の館長クラスの人々が三十人ほど集まった。黄浦区立図書館の副館長の挨拶と、我々を紹介する竹内先生のスピーチが始まり、我々の演講（中国語では日本語と逆）に移っていった。前半は、三上が「図書館と図書館建築の関係のあり方」について図書館計画の大切さを中心に話を受け持ち、後半は僕がこれまでに関わった図書館建築の紹介を受け持った。鮑氏の通訳を介した二時間ほどの会合だった。

参加してくれた人たちは、三上の話にメモを取りながら聞き入り、僕が紹介するスクリーンに映った写真に興味深く見入っていた。その表情から、我々のレクチャーの受け取られ方は六年前と全く違うのだと実感した。上海の図書館関係者達がいる日常の図書館と我々が紹介した日本の図書館とが、少なくともデジタルの上では大きな差異がなくなったことがその要因であったようだ。会合の後に案内された黄浦区立図書館の館内の様子からそう思った。ともあれ上海一日目、そして僕にとつては最も大きな仕事であった上海図書館学会との交流会はひとまず無事終えることができた。

翌十六日、上海市図書館の国際フォーラムが始まった。

上海市図書館の創設50周年を記念した国際フォーラムは、三日間に渡って行われた。正確には判らないが、中国国内のほかにもアジア、ヨーロッパ、アメリカの国々からも多くの参加があった。大筋は以下のようなプログラムだった。

大会初日は、午前中にオープニングの全体会が行われた。昼

食をはさんで午後からは分科会、夕方には歓迎の晩餐会が催された。二日目は、午前中に分科会、前日と同様に昼食をはさんで午後にはクロージングの全体会が行われ、さらに夕食と京劇の鑑賞会が用意されていた。そして、三日目には蘇州図書館視察を含む蘇州ツアーまで用意されるという、三日間まったく隙のないプログラムだった。

大会二日目午前中、三上はレファレンスの分科会において十五分間の発表を行った。先に行われた図書館学会との交流会と同様に、図書館建築の前提としての図書館計画の重要性に関する発表だった。鮑延明氏の巧みな同時通訳によって、唯一図書館建築に関する発表として分科会会場の参加者の理解が得られたと感じた。

また、竹内先生は二日目午後の全体会で日本図書館協会の理事長として三〇分間のスピーチを行った。デジタルデバイスを用いずにスピーチする自らをStone Age Librarianと称しながら、昨年九月十一日のあの事件と日本図書館協会の @your library の活動とを関係付けて、英語で語った。

「・・・様々な観点を示す本や資料を収集し、それを人々に提供する。それは、歴史における人類の様々な営み、それを語る民族の言語、そこから生まれた様々な観点和価値観、それらを提供するために記憶することでもある。単に読む資料を提供するばかりでなく、考えるために比較という方法を提供するのが図書館であり、違ったところにある考え方に耳を傾け、そして理解しようとする態度に育むことも図書館というものの重要な役割であると私は確信している。・・・」

ITに傾斜した発表が多い中であって、図書館の本質に迫るひとときを際立ったスピーチだった。そして会場からも共感の喝采を浴びた。

が座ることも少なくなかった。そして、同席した彼女たちは気さくに話しかけてきた。

初日に行われた歓迎の晩餐会では、東京を二度訪れたことがあるという香港の図書館員と隣になった。

「ITは建築を変えるか？」

香港から来た彼女は、僕にそう問いかけてきた。

「イエス。けれども、建築も図書館も一番大事なのはテクノロジーではないと思う」

と応えると、大きく頷いてくれた。咄嗟にそうは答えなければ、この問いは湿気を帯びた夏の上海の空気のように、その後しばらくの間僕にまとわりついてくることになった。

それは、「ITは建築を変えるか？」という問いが、すぐさま「建築は何のために創るのか？」ということと同じ意味に思えたからだ。さらにその問いは、「建築とは何なのか？」「建築の価値はどこにあるのか？」という根源的な問いにつながっていった。

建築は求められる用に適うことを宿命付けられている。図書館建築であれば、それは図書館という機関のために必要とされる建築を指している。そこでの建築は、図書館というビルディングタイプに収束し、かつ個々の図書館が有している目論見を反映させることになる。図書館という目的をもたないところに図書館建築はない。その点においては、図書館という内容が主であり、受容器としての建築は従であることは間違いない。

だが、用に従属することだけが建築の目的ではない。建築は必然的に形態を伴う。けれども、その形態はこの形相であって容器の表層ではない。深層の胎動から生まれるべき型の形式である。平面図だけで建築が出来る上がるわけではな

僕はといえば、このフォーラムにおいては完全な聴衆のひとりになりきっていた。言語は英語を主体として、英語の発音者には中国語の同時通訳が、中国語での発音者には英語の同時通訳が提供された。国際シンポジウムとはいえ母国で開催する会合において英語をメインの言語とすることに感心させられていた。

実際の発表の場もさることながら、食事の時間は重要なコミュニケーションの機会であった。期間中の食事は、各国の参加者が一同に会しての中国スタイルであった。それは楽しい時間であると同時に、心地よい緊張を強いられる時間でもあった。

上海市図書館の構内には小さなホテルがある。そのホテルのレストランが二百人を越える参加者の毎回の食事会場になった。レストランの中は、十人ほどが座れる円卓がぎっしりと並び、食事のたびに食卓いっぱい料理が用意されていた。当然中国スタイルだった。

予め座席が決められているわけではなく、各人が勝手に席を選んでいく。先に隣に誰が座つていようと、躊躇することなく空いている席に座る。そして、人数が揃い次第、そのテーブルの食事が始まるのだった。食事が始まれば、回転する円卓の上に盛りられた大皿料理を直接自分の箸で突いていく。その食事のスタイルはすでに何度も経験し、初対面の相手と親しくなるには上手いやり方だと以前から思っていた。食事のスタイル自体は取り立てて珍しいことではなかったが、ヨーロッパやアメリカからの参加者も戸惑う様子もなく上手に箸を使い、食事の輪に加わっていた。そのようなシチュエーションであるから、当然外国の人たちとも同じテーブルになり、隣に中国人や外国人

い。制度や企図を受容すれば、その背景にある思想までもが設計者という変換装置を経て映し出されていくべきことになる。

もし仮に建築が図書館に従属するだけの器(「ハコモ」)でしかないならば、それを建築と呼ぶ必要はない。建築を器と捉える認識自体が間違っているといってもよい。それは、他者を正しく認識しない自己本位的な傲慢さの仕業であり、建築が具備する尊厳の認知を阻害することでしかない。眼前の目的のために多くの犠牲に目を瞑った二〇世紀においては、そうした尊大な態度も許容されたのかもしれない。けれどもその認識は、利他的な近代文明の価値観に基づくあまりにも単純で定量的な指標でしかなく、けつして文化的な所作ではない。少なからず建築の力を借りて図書館という場が創り出されていることを忘れてはならないはずだ。

ITは図書館建築を変えるだろう。けれども、それは単に技術的な問題の解決に留まるものではなく、建築というものの形を変えることになるのだろう。それがどう変わるのかは、今は僕にはわからない。建築が何であるかという問いの答えは、手の届きそうなところに近づくといつも決まって遠いところへ行ってしまうのだ。

「図書館とは何だろうか？」

「ITは建築を変えるか？」という問いは、もうひとつの難題を僕のもとに連れてきていた。

六年前の上海では、図書館とは名ばかりで、本の物置のようだった。今やそうした光景は遥か遠い昔であるかのようになり、情報装置としての図書館を標榜していることをこのフォーラムで強く心象付けられた。それを裏付けるかのように、最近閉館した蘇州図書館には大人用と子ども用とそれぞれにコンピュータ

がずらりと用意されていた。

もちろんそれが手放しで褒められるものではない。印刷情報の量質ともに必ずしも十分とはいえないにもかかわらず、印刷情報の提供を飛び越えてコンピュータによる情報提供に傾斜する傾向も見られる。ネット上の情報の有用性は未だ途上にあるはずだ。そのアンバランスは、上海ならびに上海近郊の図書館が抱える問題でもあるようだ。

けれども、六年前に見せられた図書館とは比較にもならないほど、施設も内容も大きく進歩していた。そして、フォーラムから感じられた情報に対する価値認識が、住民サービスに強く投影されているようだ。情報というものに対する中国ないしは上海の政策の強さのようなものを強く感じさせられた。

僕は図書館員ではない。まして、図書館事情に精通しているわけでもない。けれども、図書館に関わる人たちが図書館を話題にするときの「図書館」が意味するものに常々疑問を抱いていた。

「図書館」について語られるとき、その場に居合わせた誰もが寸分の違いもなく同一に粹取られたものを対象としていると錯覚しているように思えてならなかった。たとえそれが「index」に置き換えられても、同様に差異ないし信じられているように見受けられた。果たして「図書館」という語彙は同じ意味で共有されているのだろうか。それぞれが恣意的に図書館を意味づけ、茫漠としたイメージで語ってはいないだろうか。そうしたもやもやが晴れる糸口がここで見つかったような気がした。

世界の図書館は情報サーバーとしての役割を果たす方向を模索しているように思える。異なる言語を用いる異なる民族がいて、そこに底通する異なる観点と価値観をも、そのサーバーは記憶する。情報はデジタル化されてWEB上を駆け巡るものだ

上海の経済事情や建築事情を、日本や台湾と比較しながら細かく説明してくれる林さんの話を耳をかたむけ、高層ビルを見上げながら、上海がもの凄い勢いで動いていることを実感した。そして、林さんにもまた逞しい中国人の血が流れていると思った。

前回の訪問からは、六年の歳月が経過した。実は、たった六年しか経っていない。

六年前には、少し気の利いた土産物を買うにも、一杯のコーヒーを飲むのも容易ではなかった。それがたった六年ほどの間に、新しいショッピングスポットがいくつも誕生し、日本から行っても日用品に不自由することは全くないばかりか、フェラガモ、グッチ、シャネルなどブランド品を手に入れることも容易いこととなった。スターバックスコーヒーだって繁華街のいたるところにある。東京で手に入るものなら上海で手に入らないものはないだろうとさえ思わせる。出発前から上海は六年前とはずいぶん変わっているのだろうとは思っていたけれども、リアルな上海は想像をはるかに上回っていた。上海での時間の流れは、日本での三倍くらいのスピードで流れているように思えたのだ。けれども、華やかな場所を一步裏に入れば、相変わらず雑然とした風景を見せてくれる。均質化された状況に均された目には、上海が許容する巾の広さはこの上なく刺激的に映った。

上海へは成田からわずか二時間半の時間で行ける。人もモノも金も世界中から手元に手繰り寄せて、何でも飲み込んで自らの身体を肥やしていこうとするような巨大な生き物のような街がすぐ近くにあるのだ。今日の日本ではけっして感じることはできないエネルギーが、そこにはあるのだ。

けではないとしても、図書館が扱うのは資料という形あるモノだけではなく、疑いの余地はない。その一方で本というものの価値が損なわれることもないだろう。だからこそ、「図書館とは何か」ということを問いただしてみる価値があるに違いない。

新天地は、閘の中からほんわりと浮かび上がっていた。

租界時代には住居として使われていた煉瓦造の建物とその間につくられた入り組んだ路地をそのまま残して再開発した盛り場である。ジャズを演奏するバーやイタリアンレストランや洒落た小物を扱っている店がならび、上海で最もファッショナブルな場所となっている。どの店も値段は日本と大差はないようだが、大勢の若者で夜遅くまで賑わっていた。そうした喧騒を他所に、林さんと僕は人気もないかわりに冷房もないマクトナルドのテラスで夜更けまで話こんだ。

林氏(Mr. Lin, Chin-Kon)は台湾の人である。武蔵野美術大学から筑波大学の大学院へ留学し、卒業後四年間ほど三上建築事務所に在籍したかつての同僚である。十五年ほど前に国に帰って自らの事務所を持った。その彼が一九九四年にクライアントの上海進出をきっかけに大陸でも仕事をすることになり、今では台湾よりも上海を活動拠点として、頻繁に台湾と上海を往復しているそうだ。台湾と中国を行き来するのは、両者の体制の違いから容易なことではないように想像されるが、ビジネスの世界ではほとんど障害がないという。政治的なことを別にすれば、同胞という意識さえあるらしい。それ以上に、そうした政治的な問題を掻い潜って商売をする中国人の逞しさのなせることだろうし、何でも飲み込んでしまう上海の仕業なのだろう。

僕はきつとすぐまた此処へ吸い寄せられて来るだろう。上海を離れる日、そう思った。

港の景色は、いつのまにか上海での記憶に摩り替わっていた。飲みかけの紅茶がすっかり冷たくなるのも気づかずに、僕は太平洋を行ったり来たりしていたのだ。

古い掛け時計が鳴った。慌しく通りへ出てタクシーを拾い、海沿いの道を空港に向かった。窓の外には、ついさつき歩いた煉瓦造の建物群が見えていた。

「上海とは何も似ていない」

函館の景色は、ただ僕の目の前を流れていった。

益子 一彦(ましこ・かずひこ)

一九五九年茨城県生まれ。武蔵工業大学工学部建築学科卒業。三上建築事務所で図書館建築などを担当。主な作品に下館市立図書館(二〇〇〇年日本図書館協会建築賞受賞)、十王町立図書館、著書に『図書館／建築／開架／書架』(丸善)がある。

日本音楽著作権協会(出)

許諾第0214186-201号